

何人かの律法学者とファリサイ派の人々が、イエスに、神さまから遣わされた神の子、キリストであるというしるしを見せてほしい、と言っています。それに対して、イエスは「しるし、証拠を求める者は、よこしまで神に背いていた時代の者たちだ」と言います。しかし、それは教えられたことを疑うことなく鵜呑みにせよ、と言っているのではありません。しるしを見たら信じる、という時に、私たちが求めているしるしは、私たちが求めているしるしです。自分の求めや願いを叶えてくれるなら、それを神さまであるしるしとして、証拠として採用するのです。イエスが私たちとの間に立てようとしている深い交わり、愛と信頼の関係のために与えられるただ一つのしるし、それが「ヨナのしるし」なのです。ヨナ書によれば、ヨナは神さまの命令の難しさを恐れて逃亡し、海に投げ込まれてしまいました。そして、神さまの遣わした大魚に呑みこまれ、三日三晩その腹の中にいました。ヨナが神さまに祈ると、魚はヨナをニネベの近くに吐き出しました。それと同じように、イエスも三日三晩大地の中にいることになる、それは、イエスが十字架につけられて殺され、墓に葬られて、三日目に復活させられることを指しています。ヨナのしるしとは、イエスの十字架の死と復活のことなのです。イエスは「このしるしのほかには、しるしは与えられない」と言った、と記されています。このしるしは人々が自分の願いによって求めているしるしとは全く違うものです。この「ヨナのしるし」には、神さまが私たちとどのような交わりを結ぼうとしているのかが示されているのです。41 節以下で、著者はヨナにまさるもの、ソロモンにまさるものであるイエスが来ている今、イエスの言葉をしっかりと聞き、受け入れること、そして「ヨナのしるし」を、神さまからのしるしとして受け止めること、それこそが私たちに求められていることであると記しているのです。

マルコ福音書では、イエスはしるしそのものを拒絶しており、この言葉はイエスに遡ることができる可能性があると考えられています。このように、イエスの活動において、しるしの問題は大きな争点であったと思われます。マタイ福音書とルカ福音書が用いたQ資料では「ヨナのしるしは与えられる」と記されています。イエスの死と復活こそ最大のしるしであって、イエスの死と復活を信じない者には、それ以外のいかなるしるしもありえないと、律法学者やファリサイ派の人々の要求をはねつけ、批判しているのです。しかし、このようなことはイエスの復活後になって初めて可能になるのですから、この物語はQ資料の段階で成立したものと思われます。著者はここで、イエスの死と復活を信じない今の世代の人々の不信仰を断罪するのです。